

もどる

認知言語学と生態心理学 — なぜ生態心理学なのか —

本多 啓 (駿河台大学)

目次

0	「なぜ生態心理学なのか」の語り方	2
1	認知言語学と認知科学	2
1.1	認知言語学の基本的な考え方	2
1.2	認知科学の知見と言語研究	2
1.3	認知言語学の研究戦略	2
2	認知意味論と生態心理学	3
2.1	認知意味論の意味観	3
2.2	生態心理学の知覚・行為観	3
2.3	意味のありか	4
2.4	生態心理学からの言語への接近	4
3	生態心理学を知るための文献	4
4	認知言語学語学の観点からのこれまでの研究成果	5
	参考文献	6

0 「なぜ生態心理学なのか」の語り方

- 自分自身の問題意識の変化にそって語る
- 認知言語学と生態心理学の繋がりについて、現時点での捉え方を鳥瞰図的に語る [こちら](#)
- 文法研究にどう役立つかについて具体的な言語現象に即して語る

1 認知言語学と認知科学

1.1 認知言語学の基本的な考え方

- 人間の言語能力のありようを明らかにすることを究極の目標とする。
- 言語能力の自律性の仮説を採用しない。

[認知諸科学の研究を参照](#)

1.2 認知科学の知見と言語研究

- 言語研究における有効性が言語学者の間ですでに幅広く認められている知見
- 各研究者がそれぞれの関心に基づいて有効性を検証しつつある知見 [生態心理学](#)

1.3 認知言語学の研究戦略

言語の科学としての認知言語学

[どちらに重点をおくか](#)

認知の科学としての認知言語学

2 認知意味論と生態心理学

2.1 認知意味論の意味観

- 言語の意味とは何か？
 - － 言語が表現する対象それ自体？
 - － 人間がそれに対してどのような捉え方をするか
- 「捉え方」：経験を記述する意味論としての認知意味論

何かをどのように「捉える」か それをどのように「知る」か
それとどのように「関わる」か

- － 身体という場における事物との接触：身体的な基盤
- － 他者との社会的な接触：社会・文化的な基盤
- － 脳における情報処理

2.2 生態心理学の知覚・行為観

- 知覚の能動性、あるいは知覚と行為の循環
- 事物の知覚と自己の知覚の相補性

何かと関わる、あるいは何かを知る、ことについての洞察

- アフォーダンス

人間と環境の関係のあり方についての事実であるとするならば、これを表現対象とする言語表現があるかもしれない。

- 協応構造 (エントレインメント)

コミュニケーション成立の身体的基盤

2.3 意味のありか

- オクシモロンとしての「生態心理学的視点に基づく認知論的言語研究」?
 - － 人間にとっての事物の意味は、(それと関わりあう人間(の頭)の側にあるのではなく)事物それ自体にある。
 - － 認知意味論は指示対象意味説をとらず、言語の意味が、その指示する事物にあるのではなく、人間の側にあると考える。

この2つは矛盾するように見えるかもしれない?

坂本さんの発表

2.4 生態心理学からの言語への接近

- 語彙獲得(小林(1992, 1997))ほか
- 「指し言語」から「語り言語」へ(Reed(1996))
- その他(佐々木(1997))

3 生態心理学を知るための文献

佐々木(1994, 1993), 三嶋(2000), Reed(1996), 境・曾我・小松(2002)ほか

4 認知言語学の観点からのこれまでの研究成果

- subjectification の認知的基盤:
 - Honda (1994a, 1994b, 1995), 本多 (1994, 1997a, 1999, 2002)
 - 探索...主体移動表現:
 - The road runs from Tokyo to Nagoya.
 - <見え> と自己知覚...ゼロ形:
 - Vanessa is sitting across the table.
 - Vanessa is sitting across the table from me.
- 「私」の表現と日英語の表現構造の対照:
 - Honda (1994a, 1994b), 池上・尾上 (2002)
 - 人間中心的な捉え方と状況中心的な捉え方
 - 「する」的な捉え方と「なる」的な捉え方
- 「視点」論
- 仮想変化表現: 本多 (1997b)
 - <知覚者の場所の移動に伴う見えの変化>
 - The road widened when we passed the state border.
 - <知覚者の状態変化に伴う見えの変化>
 - The students get younger every year.
- 時間表現と空間表現の相互浸透
 - The field begins here and ends here.
- 前置詞句主語とアフォーダンス: 出原 (1998)
- 形容詞の意味構造と探索活動: 仲本 (1998, 2000)
- 中間構文と探索活動、アフォーダンス: 本多 (1997a, 1999, 2002)
- 中間構文と tough 構文: 坂本 (2001)

- 文法化の一つの基盤としての協応構造: 本多 (2001)
- 数量詞遊離構文と探索活動・主体化: ?
- 存在表現と知覚表現のタイポロジー: ?
- 日本語の条件表現: ?

もどる

参考文献

- Honda, Akira (1994a) “An Inquiry into the Semantics of Motion, Location, and Viewing,” *Linguistic Research* 12, 23–67, Tokyo University English Linguistics Association.
- Honda, Akira (1994b) *Linguistic Manifestations of Spatial Perception*, Doctoral Dissertation, University of Tokyo.
- Honda, Akira (1995) “Notes on Subjective Motion,” *Linguistic Research* 13, 29–51, Tokyo University English Linguistics Association.
- Reed, Edward S. (1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*, Oxford University Press, Oxford. (邦訳:『アフォーダンスの心理学 生態心理学への道』(細田直哉訳、新曜社、2000年)).
- 池上嘉彦・尾上圭介 (2002) 「コトの出来(しゅったい)する場としての自己 — 日本文化への認知言語学的アプローチ —」. (文法学会 第4回集中講義).
- 出原健一 (1998) 「前置詞句主語に関する一考察—認知文法とアフォーダンス理論—」. 『信州大学人文学部人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』 32, 25–36.

- 小林春美 (1992) 「アフォーダンスが支える語彙獲得」. 『言語』 21-4, 37-45.
- 小林春美 (1997) 「語彙の獲得—ことばの意味をいかに知るのか—」. 小林春美・佐々木正人 編, 『子どもたちの言語獲得』, 85-109, 大修館書店, 東京.
- 境敦史, 曾我重司, ・小松英海 (2002) 『ギブソン心理学の核心』, 勁草書房, 東京.
- 坂本真樹 (2001) 「英語の Tough 構文への生態心理学的アプローチ」. 日本認知言語学会第2回大会発表 (*Conference Handbook* 71-78).
- 佐々木正人 (1993) 「認知科学の新しい動向 < エコロジカル・アプローチへの招待 > 」. 『言語』 22-1-12, 連載論文.
- 佐々木正人 (1994) 『アフォーダンス: 新しい認知の理論』, 岩波書店, 東京.
- 佐々木正人 (1997) 「「ことばの獲得」を包囲していること」. 小林春美・佐々木正人 編, 『子どもたちの言語獲得』, 237-260, 大修館書店, 東京.
- 仲本康一郎 (1998) 「力学的形容詞の認知言語学的考察 ~ アフォーダンス的解釈をめぐって」., 京都大学人間環境学研究科 修士論文.
- 仲本康一郎 (2000) 「アフォーダンスに基づく発話解釈—「行為の難易度」を表わす形容詞文」. 『語用論研究』 2, 50-64, 日本語用論学会.
- 本多啓 (1994) 「見えない自分、言えない自分: 言語にあらわれた自己知覚」. 『現代思想』 22-13, 168-177, (1994年11月号).
- 本多啓 (1997a) 「英語の主体移動表現、中間構文、知覚動詞について—生態心理学の観点から」. 『駿河台大学論叢』 15, 95-116.

本多啓 (1997b) 「世界の知覚と自己知覚」. 『英語青年』 142-12, 658-660, (1997年3月号).

本多啓 (1999) 「再び英語の中間構文について」. 『駿河台大学論叢』 18.

本多啓 (2001) 「文構築の相互行為性と文法化」. 山梨正明ほか 編, 『認知言語学論考 NO.1』, 143-183, ひつじ書房, 東京.

本多啓 (2002) 「英語中間構文とその周辺—生態心理学の観点から—」. 西村義樹 編, 『認知言語学1: 事象構造』, 11-36, 東京大学出版会, 東京, 『言語情報科学シリーズ第二期 言語科学』 第2巻.

三嶋博之 (2000) 『エコロジカル・マインド—知性と環境をつなぐ心理学—』, 日本放送出版協会, 東京.